

東京バッハ合唱団 月報

[第 683 号] 2019 年 5 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3- 47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No. 683

May 2019

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

廃墟に帰したパリ大聖堂

大村 恵美子 (主宰者)

いまは 4 月 19 日 (キリスト教会では聖金曜日)、2 日後には復活祭を迎えようとしているそんな矢先きに、世界は思いもよらぬ体験をさせられることになった。パリ大聖堂が夜通し燃えて、残骸をさらした朝を、私たちは突然に共有したのである。

4 月 15 日、私は、小海基牧師 (合唱団ではテノール団員) から、来年春に予定の演奏会の最後を飾る、聖霊降臨節用のカンタータ BWV 184 《待ち望みたる喜びの光》の理解のために、教会歴の中の聖霊降臨節への手引きを、月報原稿にご依頼してあったものを、ありがたく受けとったばかりだった (当月報 p. 2 に掲載)。タッチの差で、まさにその晩のノートルダム火災には全く触れられなかったわけで、このあとだったら、小海牧師の原稿にも切実な響きに加わって来たにちがいない。

この 5 月号にのせる原稿をご依頼した私として、受難 - 復活 - 聖霊降臨にまたがる間に発行となった、私のもの (同 p. 3 「バッハの音楽日記: 1724 年。そして、私たちの 2020 年」) も含めて、今回は、パリの大惨事の波及のすさまじさを、その前後で、すっかり重みを変えてしまうものだ、と、まざまざと感じている。

真意は、どんな人間にもわからない。今後ともまびすしく続くであろう、識者やちまたの人間たちの発言も、他人ごとのようなものはすべて、よく反省しつつとり入れなければならない。

私は、フランスの土地や国や住人たち、すべてを、特にと言いたいほど好きだ。昔留学した東部のストラスブールの生活には、感謝の色ばかりでしか思い出せないでいる。けれども、もともと啓蒙が早くに行なわれ、近代→現代に邁進してきた、勇敢な国民が、大きなテロに度々見舞われるようになり、若い大統領が生まれるや、みずからテロに近づくような市内デモをくり返すようになって来た。

大火災の翌朝、テレビ取材に応じるパリ市民たちは、ギャーギャーと泣き叫ぶことなく、静かに現状を伝えていた。もう、走りまわって、ものを投げたり破壊し

たりする、デモ中の逆上も見られなかった。真摯に復興を誓う大統領を支えて、みんなが相応に全力を集めて再出発すれば、必ずや活路は開かれることだろう。

ひるがえって、地球上の各国が、長年それぞれに犯しつづけた地球への、文明という名の蛮行を、ただちに認め、一国オンリー (ファースト) の浅ましさを脱却して、第 2、第 3 の大聖堂火災を、自分自身の責任と痛感しつつ必死に食いとめることではないか。いま呼びかけ合えることは、これだけである。深い心でイースター、ペンテコステを過ごさないではいけない。



■「ニューズウィーク日本版」
2019 年 4 月 30 日/5 月 7 日号

今月の公演

5 月 18 日 (土)、午後 2 時開演

第 118 回定期演奏会

会場: 府中の森芸術劇場ウィーンホール

(新宿駅より京王線で「東府中」下車、徒歩 7 分)

- ・曲目: BWV109 《われは信ず わが主よ 援けたまえ》、BWV166 《いずこへ 主よ行きたもう》、BWV188 《わが望み》、BWV79 《神は わが光 盾》
- ・演奏: S 光野孝子、A 谷地畝晶子、T 鏡貴之、B 小藤洋平、東京カンタータ室内管弦楽団、Org 新妻由加
- 東京バッハ合唱団、大村恵美子・指揮/訳詞
- ・入場券: 当日 4000 円 (全席自由)

月報 5 月号 CONTENTS

- ・ペンテコステ (聖霊降臨祭) とは何か (小海 基) … p 2
- ・バッハの音楽日記 1724 年、そして (大村恵美子) p 3
- ・大村恵美子先生・米寿のお祝い会 (松尾茂春) … p 4

聖霊降臨祭(ペンテコステ)とは何か

小海 基 (団員・荻窪教会牧師)

「私は言いたいのだ。バッハのカンタータをぜひ聴いてごらんさい。一度その魅力に開眼させられたら、これまでなんという宝の山を気がつかずに通り過ぎてきたことか！と思わずにいられないだろう、と。これもまた、大変な世界なのだ」(吉田秀和『バッハ』河出文庫、80頁。2019年文庫化)

・カンタータと教会暦

バッハのカンタータを歌っている私たちにとって「教会暦」を知らずに済ますわけにはいきません。バッハはこの「暦」の流れの中でカンタータを展開していったからです。1987年の『新共同訳聖書』刊行でこれまでキリスト教各教派でまちまちだった「イエス」や「ペトロ」などの人名・地名の呼称の方はまとまっていたのですが、「教会暦」の呼び名はまだバラバラです。この文章はプロテスタントの呼び方です。

「教会の暦」で一番有名なのは何といても「クリスマス」です。最近の日本では、お寺や神社のような所でさえもクリスマスを祝うところがあるのには、本当にびっくりしてしまいます。しかしイエス・キリストが12月25日に生まれたことを中心に、その前に4週間の「待降節(アドヴェント)」という備えの時をもつこの有名な「教会暦」の始まりには、何の聖書的根拠もありません。それに反発して、プロテスタントのピューリタンの人々は新大陸アメリカでクリスマスを祝うのをやめていた時期があったくらいです。現在から考えるとびっくりしますね。

・イースターとペンテコステ

「教会暦」で一番古い根拠をもち、ユダヤ教から引き継いでいるのは、「イースター(復活祭)」と「ペンテコステ(聖霊降臨祭)」です。2つとも太陰暦をもとにしていますから、現在私たちが使っている太陽暦の中では、毎年月日が変わる「移動祝日」となります。

「イースター」はユダヤ教の「過越祭」に由来します。昔モーセに率いられてイスラエルの民が出エジプトをした記念の祭りです。エジプトの王ファラオは、神様からの命令だという徴(しるし)を何度モーセが見せても、心を頑なに彼らの出国を許しませんでした。最後にファラオもエジプト中の人々も、「どうか餓別も持たせるから、一刻も早くエジプトを出てほしい」と頼むようになった出来事が「過越(すぎこし)」の出来事で、これはエジプトに住む、エジプト人であろうと奴隷、家畜、ファラオであろうと、その家の長子が死んでしまうという出来事です。ただし玄関の鴨居に犠牲の子羊の血を塗った家は通り過ぎたというので「過越祭」という名になったわけです。キリスト教もこれを引き継ぎ、イエス・キリストが犠牲の子羊となって血を流した十字架の出来事こそが究極の「過越」、

12弟子と祝った「過越」の食事が「最後の晩餐」であり、今日の「ミサ」、「聖餐式」となり、また罪と死の縄目から解かれて復活の命に目覚めたことを「復活祭(イースター)」として受け継いでいます。復活の曜日として日曜日を「主の日」として礼拝を守ります。

・ペンテコステとは何か？

「ペンテコステ(聖霊降臨祭)」(ドイツ語では“プフィングステン” Pfingsten)も出エジプトと関係のあるユダヤ教の「シャブオット(七週の祭り)」から引き継いでいます。「ペンテコステ」も「プフィングステン」も「50日目」という意味で、「七週」も49日目の意味ですから同じです(ユダヤ人は夕暮れから1日が始まると数えるので1日誤差が生じる)。何から50日(あるいは七週)かというのと、「過越」(正確には過越祭2日目)からです。この頃が畑にまいた麦の刈入れの祭り(出エジプト記23:16, 34:22)、「ルツ記」が読まれ、またこの日にシナイ山で「十戒」を含む「トーラー(律法)」が授けられた日(タルムードのペサヒム 68b)ということで、乳製品を味わい律法を学ぶ祭りとします。[今年2019年は、復活祭が4月21日だったので、その7週後の聖霊降臨祭は6月9日です]

ユダヤ教の三大祭にはもう一つ「スコット(仮庵祭)」という、やはり出エジプト起源の秋祭りがありますがこれはキリスト教には引き継がれませんでした。

さて「ペンテコステ(聖霊降臨祭)」は、東京バッハ合唱団の大切にしている“日本語上演”ととても深いかわりがあります。復活後の40日目に主イエス・キリストは、お弟子さんたちの見ている前で天に昇ります(この日は「昇天日」として祝われる)が、その際「約束のものを、エルサレムで待ちなさい」と言い残されるのです。その約束を固く信じて、弟子たちはキリストが十字架で処刑された忌まわしいエルサレムの町で待ち続けるのです。そして「ペンテコステ(聖霊降臨祭)」の日に天から聖霊が降って、教会が誕生したわけです。ですからキリスト教では、「聖霊降臨祭」は教会の生まれた日として祝われます。そのことを伝える使徒言行録には、キリストの処刑後たった1カ月ちょっとなのに、弟子たちが恐れることなくその処刑の地エルサレムに集まり、「聖霊降臨祭」を境にどんどん数を増していくことが記録されています。それを見ているだけでも「キリストは本当に復活されたのだな」と思わずにられません。聖霊が降った弟子たちの様子はまるで「新しいぶどう酒に酔っている」ように見えたところと聖書は伝えます(使徒言行録2:13)。この酔っているところが東京バッハ合唱団と関係があるのではなく、その前に記されているところです。

・「生まれた故郷の言葉」、「私たちの言葉で」

聖霊が降って、弟子たちが世界中の言葉で語り出したのを聞いた、各国からエルサレムにやってきた巡礼者たちが「いったい、これはどういうことなのか」と、

驚いたというのです。「この人たちは皆ガリラヤの人ではないか。どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉をきくのだろうか。……彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは」

(使徒言行録 2:7~11)。旧約聖書の創世記 11 章に出てくる「バベルの塔」と正反対のことが「聖霊降臨祭」に起こったというのです。「バベルの塔」の時には「一つの言語」であったことをよいことに人間の罪と驕りの象徴とも言うべき「天まで届く塔」を建て始め、かえって「混乱 (バラル)」を引き起こしてしまい、全地に散らされてしまったのでした。「聖霊降臨祭」では逆に、「多言語」の母語で神の業が語られて、皆が「一つ」とされていったというのです。私たち東京バッハ合唱団の「母語でバッハを歌おう」というこだわりの原点がこの「ペンテコステ (聖霊降臨祭)」の出来事にあるではありませんか。私の母校の先生 [下館和巳氏] が東北弁でシェクスピア劇を上演をする原点、石巻のカトリックのお医者さん [山浦玄嗣氏] が「ケセン語訳聖書」を作った原点もここに 있습니다。ルターから始まる宗教改革、20 世紀半ばに集められた第二ヴァチカン公会議の原点もここに 있습니다。

・教会暦のなかでのペンテコステの重み

かつてバッハの時代には、赤い典礼色の「聖霊降臨祭」はたった 3 日間で、翌週が緑色の典礼色の三位一体主日と変わり、そこから長い三位一体節が続いていましたが、最近ではイギリス聖公会から始まってキリスト教各教派でも、「聖霊降臨日」から待降節の直前までの半年ほどを、「聖霊降臨節」として覚えるようになりました。この方が従来の緑色の典礼色が続くよりも赤い典礼色が続くわけで、より華やかで、花の色も合わせやすく、また教会暦の「父・子・聖霊」の三位一体のバランスもとりやすいというわけです。

世界中の人々が東京オリンピックで集まる 2020 年の東京バッハ合唱団の春の公演 (下記) では、この「ペンテコステ (聖霊降臨祭)」に関わるカンタータ《待ち望みたる喜びの光》Erwünschtes Freudenlicht BWV 184 が最後に歌われる予定です。私たちの歌声を聞いた人たちが、あの“最初の”「聖霊降臨日」のエルサレムの人々や巡礼者たちのように「いったい、これはどういうことなのか！」と驚き、「ドイツ人バッハの作ったカンタータを歌うこの人たちは皆、東京の人ではないか。どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉をきくのだろうか。……ドイツ語でなく、わたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは！」という感想を聞くことができるのでしょうか。

2020 年、春の公演予定 (日時・会場未定)

— 演奏曲目 (1724 年のカンタータより) —

- BWV 113 《イエス 高き宝》(三位一体節後第 11 日曜日)
- BWV 93 《ただ主に依り頼み》(同、第 5 日曜日)
- BWV 78 《イエス わが心を》(同、第 14 日曜日)
- BWV 184 《待ち望みたる喜びの光》(聖霊降臨節第 3 日)

バッハの音楽日記:1724 年 そして、私たちの 2020 年

大村 恵美子 (主宰者)

J. S. バッハの 1724 年、すなわちライブツィヒのトーマス・カントル (トーマス教会合唱長・ライブツィヒ市音楽監督) に就任後第 2 年にあたる年は、私たちにとってどんな年として考えられているのか (*). また、私がここ数年の定期演奏会のプログラムを選定するとき、どんなことを考えて、2020 年にこのプログラムを指定しようとしたのか。

* 先月号月報 (No. 682) 掲載の「バッハの音楽日記:1724 年」p. 4 表組をご参照ください。当ホームページにも掲載。

合唱団月報に、この 4 曲 [左段下の囲み内参照] のプログラムが最初に公表されたのは、2017 年 7 月、第 661 号の、「今後の定期演奏会曲目と選曲の主題」としてでした。当時は、2020 年 5 月頃予定の「第 120 回定期演奏会」用として、すでに年月まで想定されていますが、その後、合唱団員数の減少等のために定期演奏会の移動を余儀なくされた結果、この 5 月 18 日の定期が「第 118 回」、といった具合にずれています。

当面、音楽ホールでの、独唱とオーケストラを伴った正規編成の公演は年 1 回とする、という方針を立て、団の態勢回復を待とうとしていますので、本年末 12 月予定の曲目 (《クリスマス・オラトリオ》後半 3 部とカンタータ BWV167) 上演は、「定期演奏会」とはせず、昨年末に試みられて高評を博した、2 つの教会での、合唱主体のクリスマス演奏会に変わりました。また、来年 2020 年の冬には、前にも触れましたが、多くのご常連客の待望の声に押されて、3 本のトランペットやティンパニとともに奏でる《クリスマス・オラトリオ》冒頭からの前半 3 部完全上演を予定していて、これが定期演奏会 (第 119 回) となりますので、来年春の公演は、おそらく教会での、縮約された形態でのコンサートとなるでしょう。経費を削りながらも、可能なかぎり、本来の姿に近い上演となるよう、ウルトラ C の実現を模索しています。

いま、わが国では、2020 年は、もっぱら東京オリンピック開催の年として、世論がつよく導かれてしまい、大天災の襲来を危惧しながらも、東日本の深刻な災害からの復興もおぼつかぬまま、オリンピック景気を盛り上げようとあせっているところです。

つまり、結果的には、バッハのライブツィヒ移住後 2 年目の、もっとも豊饒な時期のカンタータ群と、わが国第 2 回オリンピック開催との間には、何かつながりなどでも出来るのかどうか——?

私たちの過去の記録を辿ってみると、1990 年 6 月の第 67 回定期演奏会「ライブツィヒ第 2 年度のカンタータ」と銘打って、BWV 38、BWV 67、BWV 7、BWV 78 の 4 つのカンタータが演奏されています。

最近 2017 年に私が、バッハ 1724 年 (5, 7, 8, 9 月) 初演のカンタータをまとめるプログラムを思いついた動機は、今となっては思い出せませんが、どうやら BWV 78 《イエス わが心を》 Jesu, der du meine Seele を、またとりあげたくなって、多作だったその年のの中から 4 曲、となったような気がします。BWV 78 は、周知のとおり、快適なリズムに乗って“急ぎゆかん 弱くともたゆまず……Wir eilen mit schwachen”と歌う二重唱(ソプラノ/アルト)が、きりもなく、いつまでも歌いつづけたくなる、ポピュラー性のつよい音楽ですね。まったくもって偶然ながら、オリンピックにもびったりではあります!?

バッハのライプツィヒ新生活第 2 年目としては、まだこの地で子どもの死に目(すでに 3 人を失っている)にもあわず、上から歓迎されて就任して来たわけではなかったけれど、39 歳のたくましいセバスチャンは、前掲【前月号表組】のように、新曲だけでも優に 50 曲を超えるカンタータを、ほぼ週に 1 曲のペースで一気に提供しているのです。その上に、かの《ヨハネ受難曲》も新作として加わります。——すごいとしか言い様がないではありませんか。

ただ、この 1724 年の年初 1 月 1 日に、BWV 190 《主に向かいて新しき歌を歌え》が、せっかく初演されているのに、そして私たちも、1990 年、1997 年と、2 回もくり返し定期演奏会で歌っているのに、なぜ今回、2020 年には、世界中に向けてのウェルカムご挨拶となりうる、すばらしいこのカンタータをとり入れなかったのか? これは、じつは、前述のように、この合唱団関係者ならもうすぐにおわかりのはずの、大編成オーケストラへの出費が、ネックになることに尽きるでしょう。昔のセバスチャンにも、あれこれの悩みがついてまわっていたように、現在の私たちにも、同様のことが起きているのです。

でも、最晩年にある合唱団主宰者が、かつて 39 歳のセバスチャンが作曲した音楽で、またまたパワーを与えられることになるのも、おめでたいなりゆきと感じて、感謝しながら、立ち向かおうとしているのが現状です。

大村恵美子先生・米寿のお祝い会

松尾 茂春 (団員:バス)

2019 年 3 月 19 日(火)、うららかな春の日に、大村恵美子先生の米寿(88 歳)のお誕生お祝い会が行われました。

企画は 2 部構成で、①「お花見船周遊コース」(浅草・吾妻橋⇄日の出棧橋・往復)、②「小柳(うなぎ昼食)」での「お誕生お祝い会」。前半は昨年が続いて隅田川でのクルーズ。ただし時間帯は、昨年の夜桜コースではなく、日中(9:15~15:00)で、クルーズ終了後

に小柳で会食という趣向です。

参加者は合計 27 名。大村先生、お客様 7、ヴァイオリニスト 1、オルガニスト 1、ソプラノ団員 5、アルト 4、テノール 3、バス 5。

昨年と同じ「浅草水上バス・吾妻橋乗り場」に集合。集った一人一人に大村先生から、湯船にも浮かぶ黄色い 6 羽の〈あひる〉のおもちゃがプレゼントされました。

時間になって乗船し、船の前方、進行方向右側に陣取って座り、春の隅田川をゆっくりと下って行きます。兩岸にあるソメイヨシノ系の桜はこれからというところですが、時折早咲きの桜が見え、景色にアクセントを与えています。天気良く、温暖な気候で、まさに「春のうららの隅田川」といった趣き。その言葉に始まる滝廉太郎の「花」の 2 部合唱譜が配られ、乗船出航早々に皆で歌いました。ふだんバッハを歌う仲間と、こういった曲を歌う機会は稀なこと——伴奏声部の低音を前提とした編曲を無伴奏で歌う不安定さには目をつぶり、まずは遊覧気分への前奏です。

ただしそれに続く船内の音楽(BGM)は、なぜか琴の音の単旋律の録音が単調に繰り返される「この道はいつか来た道〜」に終始——下船時は無音の開放感に浸ることになります。

景色を眺めながら楽しく語らううちに、船はたくさんさんの橋をくぐり、いつしか浜離宮の先まで進み、レインボーブリッジを見る辺りで方向を変え、いくつかの停泊所を経て吾妻橋へ戻って来ました。

観光客で賑わう浅草の町を少し歩き、ここが地元である B. 久保庭さんの先導でうなぎの小柳へ。2 階の和室でお誕生お祝い会が始まります。昼食の配膳を待ちながら、B. 加藤さんの司会で、スピーチ開始。お客様から、それぞれにお祝いの言葉をいただき、団員からは各パート 2 名ずつがスピーチ。それぞれに、大村先生の働き、団の歴史、自身とのかかわり等、様々な観点から興味深いお話が繰り広げられます。

運ばれてきた美味しいうなぎをいただきながら、スピーチが続きます。そして大村先生の同窓生(富士高校)の皆様からも、味わい深く、親しみを込めたお話し、学校時代のエピソード等を伺うことができました。

後日、高校の同級生のお一人、早川喬子様よりいただいた葉書より、一部を抜粋させていただきます。

*

恵美ちゃん、きのうは楽しい一日をありがとうございました。

お元気そうで、そして相変わらずの人生猛進ぶりを拝見して、本当に嬉しかったです。これからもわれらのホープとしてご活躍ください。

いただいた〈あひる〉のおもちゃ、さっそくお風呂に入れてキュウキュウいわせながら長風呂して遊びました。ありがとうございました。

<了>